

第二期 第二十二号 (初版) pdf (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2018.05.20 定有堂書店 発行

彼らがいなくなる前に

奈良 敏行

鼻について

坂本 修一

緑髪

ワクサカソウヘイ

数学者は窓枠からいかなる絵画を見るか 芝野 浩貴

街なか・街なみ・街のおと

ムラカミヒロミ

お腹たいせつに

齋藤 仁昭

初めての翻訳体験から十七年を経て

山本千津子

鳥取あれこれ その二十一

内田 克彦

戯作三昧

秦阜 梅林

じやがいものチヂミ

あきの素生

庭とまなびし

伊達 文

なんてったって春

スザワマリコ

カタストロフィックな予感

古賀 啓三

いかのぼり

五百川知子

迷子のはなし

ドラメリア

…… 編集後記



## 彼らがいなくなる前に

奈良 敏行

(定有堂 店主)

十数年前のことだが、足を運んでみたいという講座があった。池袋コミュニティ・カレッジの「本屋さんの仕事」という若者向けの連続講座だ。遠方なのと半年近くにわたるものだったので、実現はできなかった。今頃になって初心者対象のレクチャーが気になるのも変だが、いつでも「一」を始め直すのは嫌いではない。

平凡社の太陽レクチャーブックというシリーズの第一巻に、その講座の記録が入っているのを古書で見つけ、少し時間を巻き戻すことができた。

数人の優れた講師が語っているが、二つの言葉が心に残った。「本屋さんの仕事自体が、街の中で限りなく溶解してきている」(永江朗)「何を成功と思うかの基準だけは、ちゃんと考えてほしい」(北尾トロ)

すでにこの頃から売り上げ低迷が進行している。生き延びるためには二つの路があると永江は語る。一つは、なるべく数をたくさん売る方向。もう一つは、本以外の

ものを売る方向。なぜそれを溶解というかというと、書籍を売るのが本屋のオリジンだとすると、扱う商品の變化で、居抜きで別のシヨップとなり自他の区別があいまいになるからだ。北尾トロの言葉はその点に敏感だ。オリジンから外れたところで成功しても、それは成功とはいえないのではないか、という問いかけだ。永江は、既存の書店像から独立するのも、「独立系」書店の特色だと、必ずしも否定的ではない。でも業態のありようは多様であっていいが、その現場に生きる一人の人間の立ち位置は決して多様ではない。人間の情念は「狭隘」なところにか育たない。講座に出席していたら、「何が基準かを忘れるな」と心に刻印して帰ったと思う

同じシリーズに『フォトグラファーの仕事』というのもあったので、これは古書で探して取り寄せた。ここに響く言葉はなかった。五人の講師が口をそろえて、「シャッターを押すだけだ」と言っているように聞こえた。言葉は陳腐だが、作品はとてつもなく独創的で圧倒された。でも考えてみれば、本屋の仕事も「ただ本を並べるだけ」だ。わたしが講師ならその一言で口ごもるしかなかったかもしれない。しかし本当の問題は、いつどこで、どのように、という非言語的な実践がここには隠れている。

『彼らがいなくなる前に』（ジミー・ネルソン）とい

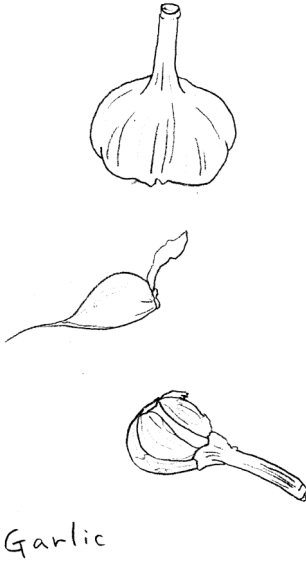
う。パイインターナショナル刊の写真集がある。少数民族を世界各地に尋ね気高い野生の文化と生活を撮影した写真集だ。一年半ほど前の発行だ。表紙のエリマキトカゲのようなマサイ族の姿が気になり、「やかましやの女王人」が、そのうち見たいから売りっぱなしにしないようにと言いつめたものだ。わたしは、仕入れはするけど中身はほとんど見ない「狭隘」な職人なので、ただ売れる度に補充をしているだけだった。ふと先日気がつくときに三十回転をしていることに驚いた。はじめて表紙をめくってみた。野に生きる部族の民が凍える山頂で朝日を浴びている。写真家はシャッターを押すだけだ。しかし、この一押しに三日もかかる。彼らは家で正装してその場に臨む。写真を見、この背景を知り、繰り返しをめぐった。解説でマルク・ブレッセは「自分たちがどれほど際立って个性的なのか指摘する人がいなかったために、彼らは自分たちの文化を守る価値のある遺産だと思わない」と核心をつく。ジミー・ネルソンと知り合つて、はじめてきちんと自分たちを示すことを自覚したのだ。

すごいと思う。本屋もときたま、取材の依頼をうけるが、わたしは本屋を取材されるのが好きではない。気後れするからだ。この心性は部族の民と同じだといえれば理解しやすいだろうか。ジミー・ネルソンが来たら、わた

しも正装してファサードに直立するだろうか。旅行者の方が時々、自分で仕入れしているんですか？ 熱心に工夫がしてありますね、と声をかけてくれる。この写真集を知って、彼らはじつはジミー・ネルソンなんだと初めて知った。ここからまた「一」がはじまる予感がする。

2018. 04. 23

### 猫風園ギャラリー



坂本 修一

(猫風閣主人)

花は、枝や茎の先端（＝はな）につくから「花」という名になったという語源説がある。たしかに、植物を見ると、多くの花は枝や茎の先端に咲いている。

大きな花をドカンと咲かせるボタンや、厚物、管物として仕立てられた菊では、それがとてもわかりやすい。花の集合美を愛でる桜のような樹木でも、一つひとつの花を見ると、いわゆる枝分かれしたその枝先に咲いているものが多い。多いというのも、中には、いわゆる「胴吹き」のかたちで咲いている花もあるからだ。

樹木は、特に剪定によることが多いのかもしれないが、下の方の太い幹や枝から、場所にそぐわない新しい細い枝を出すことがある。それを胴吹きと呼ぶようだ。先の桜の例では、枝の途中で花が直接ちよこんと咲いたものをそう表現した。花後はそこから枝が生じるのではない

かと思っている。

話を戻して、桜のように樹木全体を花として愛でる場合でも、細かく見ると、花は枝の先端に咲いている。

ルピナスやジギタリス、あるいは藤のように、小さな花をたくさん総状や穂状に咲かせる植物も、全体として見ると花の集合は茎やつるの先端の方に位置する。

端（はな）に咲くから花という名になったというのは、とても納得しやすい語源説である。

\*

動物の鼻も、体の先端についている。象が顕著な例だ。犬や猫だって、一部の不運なケースを除いてはそうだ。パグやフレンチブルドッグ、エキゾチックやアメリカンショートヘアなどは、人間の勝手に鼻を後退させられてしまった。それはそれでかわいらしくていいのだけれど、鼻腔が短いということは、鼻本来の役目を果たしにくくなっていくのかもしれない。それどころか、飛行機の荷物室での移動や手術時の麻酔では、死亡の可能性も高くなるという。誠にもって気の毒だ。

動物の鼻が体の先端にあるのは、新しく入っていく環境の空気を読みとり、食物と危険を嗅ぎ当てる機能を担っているからだと聞く。目の働きも大きいだろうが、四足歩行する多くの動物では、隠れた食物、あるいは敵の存在を一瞬でもはやく知るため、当然の位置取りというこ

とになるのだろう。

二足歩行する人間においては、他の機能の発達による慢心からか、鼻の機能は低下し、その位置もはや体の先端とは言いにくいように思う。中年以降になると、さらにその位置を、体全体として相対的に後退させている人もある。腹に空気が読めるはずもない。TY堂のご堂主の苗字ではないが、「な」と「ら」の一文字で大違いだ。

\*

注意しないといけないのは、鏡で見る自分の鼻にしろ、日ごろ見る人の鼻にしろ、気にしだすと気になってしかたなくなってしまうことだ。かつて、ほんの少し視界に入る自分の鼻が気になってしまった例について聞いたこともある。

顔の真ん中にどうしてこんなものがあるのだろうか、とか、この人の鼻はどうしてこんな形をしているのだろうか、とか、気になり方は様々だが、ともかく気になってしまふ。

時おり、簡単な漢字の形がわからなくなったり、その形に違和感をもってしまうことがある。「ゲシュタルト崩壊」ということの例にされるようだが、あれの鼻版だ。鼻を中心とした人間の顔のゲシュタルト崩壊。なんだか悲惨な響きだ。あまり気にしすぎると神経症に移行し

てしまいそうだ。いい加減なところで意識から追い出さないといけない。

花は多様だ。それと同じく、鼻も多様であつて何の不思議もない。

\*

本冊子にかつて、「目について」という拙文を掲載していただいたことがある。そのときの主題は「虫の目、鳥の目、魚の目」だったが、目も植物の芽に関連させて考えることができる体の部位だろう。機会があれば「目について——その二」を書かせていただくかもしれない。

しかし、もし読み続けてくださっている方があるとすれば、私の文体もそろそろ「鼻について」きているころだろう。本稿のタイトルどおりだ。勝手な自己満足は鼻持ちならないと鼻であしらわれ、鼻で笑われる。鼻を利かせて、自身を客観視し、適切に行動しなければならぬ。

はなはだお粗末なはなしにここまでお付き合いいただいたのだとすれば、少しは鼻を高くしていいのかもしれない。

(にゃんぷうかく・しゅじん)

ワクサカソウへイ

(文筆業)

なるほど、だからパンダは嫌な顔ひとつせず、まずそうな缶を食べ続けることができるのだ。

最近、自然科学をテーマにした書籍をつくっていて、色々と資料を漁っている途中でこの味覚レセプターを取り巻く世界に遭遇した。知らないことばかりで、ついつい本題の仕事から脱線し、のめり込んでしまった。パンダの話以外にも衝撃だったのは「吸血コウモリには塩味のレセプターしか存在しない」というエピソード。なるほどねー、血のしょっぱさだけわかればそれでいいのか。さらに驚くべきことに、最新の研究によって「基本五味」以外の味をキャッチするためのレセプターがふたつ、我々人間の舌の上で発見されたという。つまりは新味覚。これ、なんだと思います？ ひとつは辛味。これまで「辛い」という感覚は味ではなく、痛みだと解釈されてきた。しかしここに来て辛味のレセプターが発見され、晴れて「辛い」は正式に味として認定されたのだ。あともうひとつは、なんとシユワ味。つまり、炭酸飲料を飲んだ時のシユワシユワに対するレセプターが存在していたのだという。あれって味だったのですね。「基本五味」だと思っていたものが「基本七味」として正体を現し、この先もどんな新しい味覚レセプターが発見されるのか、まだまだ未知数。味覚の世界は、奥深い。

話は変わって、私は先日、髪の色を緑色にした。

人間にあつて、パンダにないものつて、なんだか知ってますか？ 答えは「旨味のレセプター」。と言われても、なんのことやら、説明不足ですね。ちゃんと説明します。

我々人間の舌には、味を感じるためのレセプターが存在している。レセプターとは、つまりアンテナのようなもの。塩味には塩味をキャッチするためのレセプターがあり、他、甘味、旨味、苦味、酸味にも然り。「基本五味」をそれぞれ捕まえるためのレセプターが、私たちの舌には備わっている。これ、最近やっとわかってきた味覚構造の正体らしい。

で、面白いのはここから。人間の舌には旨味を感じるためのレセプターがあるのに、調べてみたらパンダの舌にはそれが存在しないことが判明したというのだ。つまりパンダは旨味というものを感じることができない(！)。

さしたる理由はなかった。強いていうなら、「春だしちよつと気分でも変えるか」くらいのものだった。ところが、実にケミカルなそのグリーンの頭髮を手に入れた瞬間、気分よりも大きななにかが変容した。なんとというか、この世に隠れていた味を、知覚するようになってしまったのだ。

具体的にいえば、それまでは気にもとめていなかった自分に対する他者からの意識が、非常に気になる。この髪の色を、みんなはどう思うだろうか。褒められたり、逆に顔をしかめられたりしたら、どうリアクションを返せばいいのだろうか。いままで無視で足りていたものが、無視できなくなっている。分子レベルで、他者が自分に向けている視線が気になる。こんなこと、いままでなかったのに。なんだか自分が自分でなくなったような、不安定な心地を味わっている。一体、どうしてしまったのだろう。

そういえば、味覚にまつわる資料の中に、こんな記述があった。塩味しか覚えない吸血コウモリの舌に、甘味レセプターを植えつける。するとそのコウモリは、ゴクゴクとコーラを飲み始めるのだという。なるほど、だとすれば。この緑色の髪の毛は、まさに私にとっての、新しい味を感知するためのレセプターなのではないだろうか。

ここまでずっと、黒い髪で生きてきた。黒髪のレセプター一本槍で、この世界を知覚してきた。ところがなにを思ったのか、私はその黒髪レセプターを捨て、新たに緑髪レセプターを自らに植えた。そして、世界の風景がいままで慣れ親しんできたそれとは違って感じられるようになった。そうだ、これが今回の感覚変容の正体だ。

春はうるたえるにはびつたりの季節だ。新学期、新生活、新色頭髮。みんなそれぞれうるたえている。ピカピカのランドセルも、おろしたてのスーツも、緑色の髪の毛も、新たな味を知るためのレセプター。うるたえながら、ゆつくりと新世界の醍醐味を知っていく。でも、どうしてもその味が馴染まなければ、別のレセプターを植え替えればいだけ。どうやらこの先にも、まだ知らぬ味が無数に存在しているようなのだ。

私も、この緑髪にあと一か月先もうるたえているようなら、黒色に戻そうと思っています。



## 数学者は窓枠からいかなる絵画を見るか

芝野 浩貴

(地球探検家)

全国の子供達に英語で啓蒙活動するために巡業している人がいる。その人の人脈で数学を教える縁が増えることがある。彼の最終目標は遠藤周作のような小説を書くことだと。遠藤周作は、東京生まれであるが、遠藤家は江戸時代に池田家の御典医をしていて、父常久が養子になったことから、湯梨浜町にゆかりの家でもある。そんなこともあり、いつか遠藤周作記念館を訪れたいと思っただけだったが、実現したのは一年前で、スコセッシ監督の映画「沈黙」を観た後だった。

「腐敗した矛盾に満ちた中で、いかに人間としての倫理と善良さを保てるか」はイタリアのマフィア社会の中で育ったマーチン・スコセッシにとっては、生涯のテーマである。黒澤明、溝口健二、今村昌平などの日本の監督の影響を受けているが、元々はカトリックの司祭を目指していたらしい。そんな諸々の背景が、遠藤周作の「沈黙」を映画化した。一九八八年の黒澤映画「夢」に出演した時に原作を読んで以来28年かかっただけの製作だった。今回の「沈黙」は、日本人でないスコ

セッシ監督が日本の原作を日本人キャストで撮っているが英語で台詞が行われており、日本の文化・宗教意識を世界に問う形となった。新渡戸稲造の「武士道」が国内向けでなく、英語で書かれていたように

フレイヤ神父は、本当に棄教したのか？ 仏教に対して何を思うのか？

ロドリゴ神父は、師のフレイヤを赦すのか？

自分を陥れたキチジローを赦すのか？

ガルベ神父は何を救おうとして死んでいったのか？ モキチたちは、何を守ろうとして磔で死んでいったのか？

キチジローは、騙した自分をわかつていながら

なぜロドリゴに関わり続けるのか？

元信者の井上筑後守は、日本の信者の棄教を認めずに、なぜロドリゴ神父の棄教に拘ったのか？

イエスはロドリゴが踏み絵を踏むことを決意した時に語りかける。弱い神の誕生の時だ。

当然、カトリック教会は、弱者救済のみにスポットを当てすぎていること、神父が踏み絵をすることに違和感を覚え、批判している。

しかし、「侍」を始めとする他の小説を併せてみても、カトリック信者であった遠藤周作自身が沼から離れて立つか、沼の底に沈むかの二元論でなく、沼の中でもがくキリスト教を描いたことに意義がある。原作が書かれて半世紀経った



今でも、映画構想から28年かかった今こそ、世界に発信すべき事実だろう。フェレイラ神父が「日本は沼地である」とロドリゴ神父に言った苦悩の意味を。

モキチの役を塚本晋也が演じていた。この役を実現するまでに、大岡昇平原作の『野火』で映画監督と田村一等兵の主役を務めている。大岡昇平の小説の中で『俘虜記』と『野火』を比較して、命を奪うことの責任を、どれくらい神の判断に委ねるかの違いを、柄谷行人が論じている。市川崑監督の時よりもカニバリズムに直視していた。この作品も構想から20年かけて製作された。製作費がなくて、プリコラージュとして、戦車や刀など自作し、スタッフも出演者として掛け持ちしている。(塚本晋也監督には実際に会ってエピソードを聞いた)

「神は何に對して、どれくらい語りうるのか」というテーマでスコセッシと塚本晋也は一体化している。

始発のバスで長崎駅を離れ、さくらの里ターミナルで乗り換え出津文化村で降りた。

「人間がこんなに悲しいのに 主よ海は あまりにも碧いのです」

この文が刻んである碑は歴史民族資料館の下の海岸沿いにあった。その日は、霧でほぼ何も見えないが、波の音は聞こえた。しばらく目を閉じて、じっとキリシタンの声を、遠藤周作の見たものを、スコセッシの想いを想像してみた。

「白い海と白い空がこんなに切れ間なく繋がってるのに 神よ 人間はこんなに醜いのです」

歴史民族資料館の上にはド・ロ神父記念館がある。ド・ロ神父は、説教だけでなく、人間の生活に必要な農業や漁業のやり方、児童の教育、授産、土木、建築、医療、福祉のあり方など村民に教授してきた人だ。私財を投げうち、故郷のフランスヴォスロール村(長崎市と姉妹都市)に帰ることなく、46年間海外に尽くした。益城郡出身の数学者遠山啓は、「障害児教育を実践せずして教育や数学を語るることなかれ」と言っていたが、ド・ロ神父がとりわけ、子供たちに算数の重要性を説き、教えていたことがその言葉を思い出させた。

そして、二〇一八年春に「修道士は沈黙する」の映画に出会った。これまたイタリア人監督である。

G8財務相会議が開かれる前夜にIMF専務理事が殺され、その理事から告解された二元数学者の修道士が市場経済に翻弄される先進各国の思惑に對して沈黙する。G8に絵本作家やミュージシャンが呼ばれているのも経済⇨神か?のメタファである。金は格差を産み、神は格差を嫌う。カウンセラー・人工知能・神が交錯する中で沈黙を破った時、数学の風景が見えたのである。

## 街なか・街なみ街のおと

ムラカミ ヒロミ

フライングブックマン

街並みが大きく変わる時期というものがあるらしい。

最たるものは、戦争や災害であろうが、中にはオリンピックなんてものもある。先の大会が東京の町を良くも悪くも大きく変えたことは、多くの先達が書き残している。来る大会がどれ程の変化を齎すのか、外観の変化程度で済めば儲けもの、という気がしてならない。

鳥取の町も近頃とみに槌音がかまびすしい。

敬愛高校の新しい校舎が姿を見せ、赤十字病院も今月のオープンに向けて急ピッチである。総仕上げに市役所が移転、取り壊しとなれば、この辺りの景観は一変するだろう。

日赤は、最も古い街道側の病棟を取り壊して完工となるだろうが、この小児科には、子供の頃ずいぶん世話になった。診察室の医師のデスクのガラスの下に沢山の犬を描いたポスターが敷かれていて、これを見るのが好き

だったようだ。リノリウムの長い廊下の真ん中に長椅子が背中合わせに並んでいて、そこが各科の待合室になっていた。外光が入らず、年中薄暗い場所だった。

そうそう、院内は下足厳禁で、玄関を入れて左側に大きな窓の空いた下足室があり、ここで靴を預かり、スリッパを貸していたのを思い出す。現在の玄関ホールに不自然なスロープがあるのは、上がり框の名残である。

既に取り壊されてしまった一番奥の病棟は、ちょうど出来上がった頃、祖母が入院していたので、病室がピカピカだったのを思い出す。市内に、あんなに高い建物はなかったので、眺望絶佳であった。自動エレベーターが珍しく（何せエレベーターのある建物は大丸百貨店くらいで、ちゃんとエレベーター・ガールがいた）、いつも操作する際に、昇りを押すのか、降りを押すのか迷ったものだ。（自分がどこへ行きたいのかを基準にする、ということ）が分からず、籠を現在位置から自分のいる階にどう持つてくるのかを考えてしまうのだった）

県立中央病院も、競うように目下新築中で、ずいぶん大きな建物になるようだ。現在の病棟ができた当時、何度か通ったが、ホテルのロビーのような総合受付が印象的だった。三叉路だった丸山付近の国道が四つ角になったのもこの時だった。

立川にあった移転前の病院も知っている。現在の鳥取

市文化センターがある場所だ。三階建ての細長い建物が二棟並んでいたように記憶する。何だか怖いような場所だった。この病棟は、鳥取大火後の復興建築のひとつで、当時は相当モダンな佇まいだったのだろうが。

そういえば、在学した小学校も中学校も復興建築で、従って、我々が入学した頃は、もう相当に古びており、雨漏りの痕が天井や壁を這い、鉄の窓枠も歪み、怪談話があればこれ囁かれるような校舎だった。その建物も、耐用年数を過ぎ、とつくに建て替わってしまった。

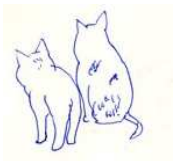
家の近所には、鶏鳴塾予備校という学習塾があり、一時期通っていた。駅前に拡張移転して、長く無住のままになっていたが、ついこの間、とうとう取り壊された。解体の過程を毎日眺めて、表からは見えなかった校舎が見えるようになり、そうそう、こんなだった、教室がこうで、職員室がああで、と懐かしく思い出した。

市内では珍しい洋食レストランだった風月堂ビルも、先頃ついに解体された。営業を止めたのはもう何十年も前だが、ピクトリアン・ゴシックの（というよりもどこかの国の飾り窓のような）廃墟めいた建物だけがずっと残っていたのだ。

記憶に残る最も大きな変化は、駅前の大改造である。昭和四十六年の駅前大火で、現在のサンロードを挟む三角地帯（若桜街道、太平洋線、錦通りに囲まれる）が焼失した。ここには、東映系の映画館や、自転車屋、土産物屋を始め小規模店舗が蟄集し、中心部に闇市の生き残りのような市場があった。子供には、まるで九龍城塞（を知っていた筈はないのだが）のような迷宮地帯で、親とはぐれたら二度と再び外に出られないのではないかと、と思わせるような恐ろしい気な所であった。この一帯が灰燼に帰したのである。

しかし、禍福は糾える縄の喩え通り、鳥取駅の高架計画が一気に促進され、南北一体化、駅前、駅南再開発などが次々に実現し、今日に至るのである。

火事とは直接関係ないが、今井書店駅前店が改築されたのもこの頃で、旧とりせんビルで仮営業していたのを思い出す。その新店舗も老朽化には勝てず、数年前に役割を終えた。跡地は今も更地のままである。



# お腹たがっせし

坪井日記 ④

齊藤仁昭

(長崎書店)

4月4日。夜中にトイレに目が覚めて便座に腰掛けていたがなかなか排出ができず腹痛がしてきた。段々胃の辺りも気持ち悪くなってきた吐き気をもよおしたが口からも出ない。台所で水を飲んで座り直したところ腹痛が激しさを増して床に倒れ込んでしまった。誰か呼ぼうにも痛みで声も出せず脂汗がひどい。床で寝たら治るのか、食中毒なのか、飲み過ぎなのか潰瘍が再発しているのか、穴が空いたのかなどと考えているうちに痛みも引くかと思つたがまったくダメで、こりや救急車だと思つたところ、妻が起きて来てくれて驚いて119番。妻は初めての119番だったそうで動揺して勝手がわからず、家の住所も思い出せない。声を振り絞って住所を伝える。救急車を待つ間、陣痛ってもっと痛いんだろうな、自分には耐えられないやという女性への敬意が頭をよぎっていた。

来てくれた救急隊員の方々が天使に見えた。実際は痛みで目も開けていられなかったので声しか聴いていないのだが、声だけ聴こえるというのも天使的な気がする。痛む箇所を確認してくれたり、痛みを和らげる呼吸の仕方(「長く息を吐いてみてください」)などアドバイスもしてくれたりする。ぶ厚いレジャーシートのような感触のものに乗せられ階下の救急車へ搬入。こんな凶体の私を運んでくれてありがとうという気持ち溢れる。何軒か急患の受け入れを断られる無縁だが電話だか話を聞いた。酔いどれの知人のあの女医がいる病院だけは避けたいと願った。あとで何を言われるかわかってもんじゃない。

病院に着いたら看護師さんが励ましてくれてまた天使を見た思い。採血のあとに点滴を刺され、CTを撮りますからねーと言われる。呼吸の仕方を習ったからか痛みは少し和らいだような気がしていたが、失禁するのじゃないかという思いが痛みの波に紛れて込み上げて来て撮影が早く終わるのを祈った。声も少し出せるようになったようだ。撮影後に簡易ベッドに寝かさればらくすると便意がきた。トイレに連れて行ってもらい着席。メーターがぐんぐん下がっていくような具合にほぼ水のようなものが出てきた。腸が空になったような感覚。脳に血流が戻ったのか意識も冴えてきて身体も随分楽になった。

しかしまだ自力では動けず、移動は車いすを押してもら  
う。

検査の結果、「よくわからないが腸が腫れています」  
とのこと。朝9時まで寝かされ、造影剤を打ってCTを  
撮り直し、再度血液検査を受ける。造影剤は初めてだっ  
た。体内が熱くなりまると言われ恐れた。たしかにジン  
ジン熱くなった。もう一度簡易ベッドに戻され、点滴が  
終わったら帰っていいですよ。今度内視鏡検査をする  
ように言われる。

帰宅後2日間は水分しか摂らないようにした。この  
ところ忙しかったし、なんだか仕事のストレスで暴飲暴  
食をしがちだったので胃腸が弱っていたのだろうと推測  
し、絶食後は豚骨ラーメンと缶コーヒをやめ、お酒と  
生ものも控えるようにした。今はだいぶ調子も良くなっ  
た。

もともと胃が強い方ではないので胃のことは気にして  
いたが、腸のことはおざなりにしていたかも知れない。  
腹に力が入らないと何もやる気が起きそうにないのでこ  
れからは腸のことも考えないといけないなと強く思う。

ここ数年、腸内環境だとか腸内フローラだとか言う言  
葉をよく耳にする。腸の表面積はテニスコートと同じく  
らいだという。広大な面積が襞だとかに折りたたまれて  
いるものって興味深いなと思っていたが、本もそうです

ね。一冊の本のページを全部広げたらどれほどの広さに  
なるのだろうか。書内環境、書店フローラ。善玉悪玉入  
り混じってなるだけいいアウトプットができる書店づく  
りを目指したいなとこじつけた。

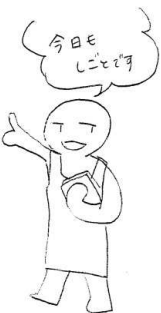
\*

ラップしたくてパラッパ  
ー布団かぶってプルップ  
ー見つめ過ぎたら飽きた  
酒とタバコを買ってこい

ついに目覚めて言ったさ  
シャンとした目で言ったさ

私 私 私 私 私 私 私  
私 私 私 私 私 私 私

(ケバブジョンソン「ソソ」作詞…橋本悠)



## 初めての翻訳体験から十七年を経て



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

ウラジオストクから嬉しいニュースが届いた。六月二日に戸泉米子著『リラの花と戦争』の全訳ロシア語版が出版される。戸泉さんを知る地元の人々から長く待ち望まれていたが、ようやく実現した。

『リラの花と戦争』は一九九八年に福井新聞社と福井テレビによって出版された。三章とエピソードからなり、全四九七ページ。現在は電子版のみである。

戸泉米子さんは一九一二年、高松市生まれ。一九二一年にウラジオストク在住の伯母さんが墓参のために帰国された時、夏休みの期間だけウラジオストクに来ないかと誘われ、ウラジオストクに渡ったが、この町とロシア人を気に入ってそのまま現地に残り、極東国立総合大学

を卒業後、

日本人と結婚、出産された。社会主義体制のソ連でスターリンの大粛清の中を生き、一九三七年に強制退去で日本へ帰国。ここまでが第一章、一五八ページ。

極東国立総合大学で教鞭を執られていたモルグン・ゾーヤ先生は戸泉さんとも親しく、私はウラジオストクでの仕事を終えて、帰国後の予定が何もなかったことから第一章を一緒に訳しましょう、という話になった。一九二一年から三七年までのウラジオストクの町の様子や人々の暮らしを戸泉さんの目で見れること、多感な青春時代に戸泉さんが感じられたことなど興味深かったが、歴史の意味を持つパルチザンや赤軍のこと、社会主義独特の制度やノルマなど、文字だけを追ってもなかなか想像できなかつた。現地で生活していたので日常会話はできたが、翻訳となると別問題。出来事としての事実は何とか訳すことができても、単語を機械的に置き換えていく作業ではない。著者はどういう気持ちでこの言葉を使っているのか、背景にどのような感情があつての言葉か、適したロシア語の言葉は何か？文字として残る翻訳では文法や綴りの間違いは許されない。三か月間かけて自分で訳したものを持って、夏にはモルグン先生の自宅に泊まり込んで、朝から夜中まで一緒に読んでいく共同作業が

始まった。息抜きはダーチャでの畑仕事。

二〇〇一年にウラジオストクで五〇〇部を出版できた。ウラジオストクに住んでいた時にお世話になったロシア人たちへプレゼントした。小さい頃から文学作品に親しんできたロシア人だから、予想していた通りの言葉を読んだ。 「内容は伝えているけれど、全く文学的な表現にはなっていない。どうして最終的に文学者の手にゆだねなかったのか。書いてあることを伝えていただけは鑑賞に値しない」 本当に厳しい言葉だったが、覚悟していた。何を言われようと、モルグン先生と私の二人で訳すことに意味があること、戸泉さんを知る人たちに戸泉さんの生きた時代を知ってほしかったこと、すべてのプロセスを有志のみで行ったので時間も資金も限られていたこと、そして売るためのものではなかったということ。それでもほとんどのロシア人は喜んでくれて、第二章、第三章を読みたいとの声が上がってきた。

実は、第二章、第三章のほうが涙を誘う。第二章では一九三八年から満州国ハルビンへ家族と渡り、ソ連軍の満州侵攻から敗戦、そしてその後の收容所での生活、子供を抱える母として生き、時にはソ連軍の軍人たちと対等に交渉をしていく戸泉さんの姿とともに、ソ連軍に属

する様々なロシア人たちの言動が興味深い。ソ連軍の信頼を得て、通訳として日本人捕虜のために再びウラジオストクで働く決心をした戸泉さん、中国の土となった二人の子供への思いを断ち切って新たな生活が始まったのが第三章からだ。

いつになったら第二章、第三章が読めるのか、という声絶え間なくあったが、このたび戸泉さんがウラジオストクに滞在された一七年間という、同じ年月を経て全訳が出版されることになった。初めの一步が一步で終わらなかった。若いロシア人日本語研究者に感謝したい。

手元にある本の帯には「ロシア語は平和の武器」と書かれている。戸泉さんはいつも「私のロシア語は平和のためにしか使わない」と言われていた。ここだけは文学的表現でなくて、そのままロシア語の単語に置き換えてもいいだろう。そして「ロシア語は」という箇所を世界の様々な言語に置き換えることによって、外国語を学ぶ目的は人それぞれであっても、常に平和に結びついているものだと思いたい。

# 鳥取あれこれ その二十一

内田克彦

(地域研究家)

る。しかし「それ等を振りすててまでも行かねばならぬ僕のエキゾチシズムを、僕は自分で何うすることも出来ませぬ」と朝鳥は書いた。家庭と恋。そして文壇。「現在の日本のあの狭くるしい文壇などはどうだ。芸術の本能などはすっかり忘れてしまつて、ひたすらに同輩を抜かうとして無価値な煩鎖にばかり没頭して居るではないか」といった不満も募っていた。

因みに、荒木郁子は『青鞥』の社員であり、姉が滋子、その娘が道子、その息子が一郎である。

ところが、わずか一年にも満たず翌一九二一年八月初旬頃帰国する。みどりの発病のためである。朝鳥は、この間の経緯を、『婦人公論』一九二二年一〇月号に「愛調悲曲三部篇(一) 滅び行く生に対する伴奏—亡妻加藤みどりに—」と題して詳しく書いている。

お前の不治な病気が、まだ僕の乗つたボルネオ丸が目的のバタビアに到着しない前に発したと云ふ事は、僕にとつては全くどうしてよいかわからない程に、困乱の感情を渦巻かせてしまつた。

みどりたち母子を預けていた「僕の郷里である伯耆の

朝鳥の日本出発に際しては、多くの作家が集まつた。

一九二〇(大正九)年八月二二日付『時事新報』「文芸消息」欄には、次の記事が記載されている(木村一信著「ジャワ体験の言説」『〈外地〉日本語文学論』所収論文から筆者により再引用)。

一昨日の同氏送別会は島崎藤村、長谷川天溪、内田魯庵、片上伸其他五十餘氏参集頗る盛会であつた。

朝鳥は何故ジャワに向かつたのだろうか。朝鳥の紀行文を集めた『爪哇(ジャワ)の旅』が一九二二年に刊行され、二〇〇二年には復刻されており、和田桂子氏による「解説」にその理由が述べられているので引用する。

「燃ゆるばかりの恋」も日本に置いてきた、と朝鳥は書いている。これは紛れもなく荒木郁子のことであ



僕の「実兄からの手紙によって知った朝鳥は、「本郷のM君、本所のS氏、神田のA女史、それ等の人々がお前の枕頭にあつて親切に慰めて呉れられる事だけを頼りにして居た」が、みどりの実父からも「医学上から到底望みのないことを云つてよこして、お前の生前に一度帰朝して呉れと云ふ切なる手紙が来た」ため、帰国する。信州の伊那谷の父の元にいたみどりを東京に連れ帰るときの、寝台車での情景を書いた次の一文は悲痛である。

『よく帰つて来て下さつた。帰つて頂戴ね。』と云つた。

『帰つたぢやないか?』

『私の心に帰つてね』

『……………』

一九二二(大正一一)年五月一日、みどり死去。

朝鳥は二三年五月、日本女子高等学院(のちの昭和女子大学)の講師となり英文学を講ずる。日本女子大学校を中退して入学してきた青柳寿々子と、卒業後の一九二五年六月再婚する。朝鳥三九歳、寿々子二六歳であった。朝鳥は同年四月に、立正大学予科講師になっており、その翌年には同大学の文学科講師となる。(下平満編著『市

川房枝と加藤壽々子―戦後松本の婦人運動―』による) 壽々子も、一九四〇年市川房枝らの婦選獲得同盟が発行する『女性展望』の編集員となり、また一九四三年にはコンラッド著『南海の望楼』を翻訳出版するなど、語るに事欠かない人物であるが、またの機会としたい。

壽々子が保管していた朝鳥の関係資料は現在大町市文化財センターが所蔵している。「大正末期から昭和初期にかけて朝鳥の交遊のあつた作家、文化人からの書簡類、著作物、雑誌、新聞切り抜き等々約八百点に及ぶ。」(吉上昭三著『ポーランド文学と加藤朝鳥』『ポロニカ』)

みどりと比べると、朝鳥の研究は余り進んでいない。交流のあつた同郷の文学者の研究書でも、荒波力著『知の巨人 評伝生田長江』では、「長江は、千駄木時代に加藤朝鳥・みどり夫妻の仲人をしていた」と触れるのみであり、上田京子著『生田春月への旅』では、『詩と人生』の中から朝鳥による春月評を載せるのみである。今後の研究の進展を待ちたい。

(この項、了)

# 戯作三昧

くアランの許暫し思索に耽るく

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

0

美術や、音楽に於ても楽器製作では普通に受け取られそれなりのジャンルを成している此の分野。クラシック音楽とりわけ我が国樂壇では未だ絶対タブー視され、まるでさうなったら価値がほぼ0になってしまったかのやうな大スキャンダルに發展、商品としては名曲も大作曲家のブランド銘を喪つた刹那、砕け散つた骨董みたひに扱はれる。

1

古典歌曲で「ニーナの死」が夭逝の天才ペルゴレージの作と信じられ、「モーツアルトの子守歌」もフリースが一九九六年作曲発表したものであることが確認され、他にはかの「バッハのメヌエット」として余りに名高いト長調のそれが。大規模なものではやはりモーツアルトの第六、第七及びニ長調の協奏曲「アデライーデ」これらの偽作が認められた。此の辺りは一聴して「モーツ

ルトぢやないだらう！」といふものだが味あひは格別、協奏曲全集にも収められリリースされたディスクも少なからず。名演奏家や指揮者が挙つて演奏したものだ。ユニークな「おもちゃの交響曲」は永いことハイドウン作といはれ、否天才の父レオポルド（モーツアルト）こそ其の作家だと。現在はそれも否定で二転三転の憂き目に遭つてる、地下の其の人は嗤っているだらう：勿論その中で究極の逸品と云へば何と云つてもモーツアルトのレクイエムだらう。何しろ作家自身手掛けた部分が余りに少な過ぎる！それが建築に喩へれば恰もガウディの聖家族教会の如く称へられている不可思議・此らのリストは氷山の一角に過ぎず、大抵は余りにヴィーン古典派大家のブランド銘を欲しがるばかりに捏造された偽作の数々。しかし本当に此らは偽作判明後にその古典的価値を消失してしまつたのだらうか？

2

「ハイドウンのセレナーデ」——昔は樂語もソナタは奏鳴曲、フーガは遁走曲！とよばれデイヴェルティメント、ラプソディは嬉遊曲、狂詩曲。ワルツは円舞、ロンドは輪舞。辛うじて残っているのは交響・協奏・変奏・行進曲位。中でも白眉と云へば、夜の奏樂に就ひて。ノクターンは夜想曲、では平成生まれの読者諸氏、セレナーデをかつて何とよばれていたかご存知だらうか？ 小夜曲、或

いは窓下樂！朔太郎・中也、道造も皆此らを詩に咏んだものだ：其の小夜曲を教へて呉れたのが、「ハイドウンの小夜曲」である。幾度ともなく舞台で弾いた其れは確かに、この作家の旋律にしてはチト甘過ぎる。夢見るやうなそれ、展開の手口も重厚と云ふよりは感傷的。しかし其処にこそ窓下樂の醍醐味があり恋の囁きの潜む森が在る。此の作品の面白いのには、独立した小品としてポピュラーな緩序樂章だけでなく逸れを擁する全樂章が偽作と判明したのだ。甘くない「小夜曲」を中軸に全体もさして長くない事から四重奏全曲が「セレナーデ」と謳はれ幾多の名演を生み、ハイドウンアルバムにもかの！「皇帝」四重奏曲等とカプリング堂々リリースされて居たものだったが現在「偽作発覚後」は、以下のやうにカタログに記されている。ホーフシュテッター作曲弦樂四重奏曲へ長調作品 3/5 「セレナーデ」〜傳ハイドウン

### 3

いったい「名」を喪つた途端、此らは本当に無価値になつてしまつたのだらうか？ そんな事は一向にない。例へ「詠み人知らず」や「ラファエロ派」云々と名称こそ違へ、何の輝き失せる事無く依然美術館や書架に鎮座坐している、美術や文学の古典と同じくそれらは今も樂の古典と謳はれている。一時は大家の逸品とも信じられやがて名を喪つた名曲の数々。我々は「名を」聴くのでは

なく「実ヲ」こそ聴くのだから。

2018. 04. 01

- 今回の二枚 ① R・ホーフシュテッター作曲弦樂四重奏曲へ長調作曲 3/5 「セレナーデ」〜傳 J・ハイドウン〜イタリア四重奏團 (1970年) / ラノライウ、Arkadia)
- ② M・カサドシユ Vln 協奏曲ニ長調「アデライーデ」K<sup>2</sup> 追加 294a〜傳 W.A.モーツアルト〜他 Y.メニニューヒン Vln 2 パリ交響樂團 P.モントウ指揮 (Biddulph)

画. A. T



## じゃがいものチヂミ

あきの素生

(くうねるめがね)

新じゃがの季節である。

と、書こうとして、新じゃがの季節はいつ頃か、念のため調べてみた。

春先から九州産、5、6月頃に関東産、7、8月頃に北海道産のものが出回るらしい。新じゃがの季節、結構長い。

じゃがいもは好きだ。煮てよし、焼いてよし、揚げてよし。

小学生の夏休み、両親とも働いていたので、祖母が面倒を見に来てくれていた。もちろんお昼ごはんも作ってくれていたが、小3の頃だったか、じゃがいもを短冊切りにして炒めるという料理を自分で作るようになった。強く記憶に残っているので、何度も何度も作ったのだと思う。祖母は、はらはらしながら見守っていたかもしれない。高学年になる頃には、豚ばら肉の薄切りを入れる

ことも覚え、以来、ずっとレシピは変わらないまま、ここぞというとき(家にあるもので、でも、特別おいしいものが食べたいとき)は、これを作って食べる。味付けは塩こしよのみ。しゃきしゃきの歯ごたえがしつかり残っているのが好みだ。卵を載せて、オムレツにするのもいい。

最近では、皮をむいたり芽を取ったりするのを億劫に感じてしまうことも度々だが、じゃがいもは、自分にとって、思い入れのある食材である。

以前、ヨガを習っていた。仕事を通じて知り合った方が、インストラクターの資格を持っていて、数人で集まって教えてもらうようになった。会場は先生の友人宅で、猫が4匹いた。いつもいる猫、時々出奔して、ワイルドな様相で帰ってくる猫、控えめ、食いしん坊など、個性はそれぞれ。基本的には皆クールだが、寒い時期には、ポーズをとっている最中にくつついてきたりして、なかなか癒された。

その教室では、レッスン後、たまに「一品持ち寄りごはん会」をした。ごはん会だけに参加することもでき、農場を営む人、林業に取り組む人、役場で働く人など、多彩な面々で食卓を囲んだ。食いしん坊の猫が、自分もメンバーの一員であるというようにテーブルの前で姿勢を正し、何やら得意げな顔をしていたのを覚えている。

楽しくおいしい会だったが、野菜や果物を作っておられたり、山菜が身近にあったりと、「食」の近くにいる皆さんから、いろいろと教わる会でもあった。お茶碗の底で包丁を研ぐという技も、ここで学んだ。

最も印象に残っている料理が、「じゃがいものチヂミ」だ。

これは、農場を営んでいる方が、韓国から来たウーファーさん（有機農業を体験しに来た人、というような意味だろうか）に教えてもらったという一品。

作り方はとてもシンプルだ。じゃがいもをすりおろして、焼く。

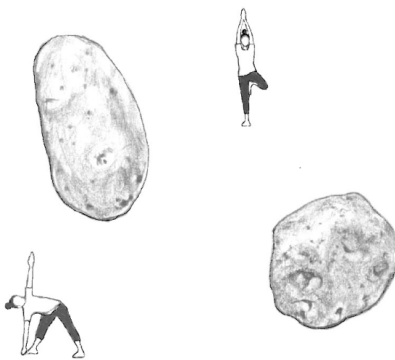
じゃがいもの下ごしらえで、あく抜きのために水にさらすことがあるが、この料理ではそういった処理をしないので、でんぷん質で粘り気が出て、もちもちしたチヂミとなる。丸ごとじゃがいも味のチヂミは、じゃがいも好きにはたまらない。

…とはいえ、やつぱり少しさみしいか？ と思い、一度具を入れて作ってみたことがある。結果は失敗。うまくチヂミ状にまとまらず、なんだかよくわからない炒めものになってしまった。じゃがいものでんぷんには、そこまで「つなぎ」としての力がないようだ。

じゃがいもをいくつもすりおろすのが大変といえは大変。でも、その頑張りが報われる料理である。

焼きあがったチヂミは、「玉ねぎ醤油」をつけて食べる。玉ねぎ醤油とは、醤油に玉ねぎのみじん切りを入れたものだ。10分も漬けておけば、玉ねぎの旨味が醤油に染み出て、何ともいえない味わいになる。こちらに至ってシンプルなのだが、すこぶる旨い。これだけを白いご飯にのせて食べても、十分いける。じゃがいものやさしい味に、パンチを添えてくれる優れたタレだ。

春は新玉ねぎの季節でもある。



（イラスト・あきの素生）

# 庭とまなざし

伊達文

(人生休憩中／ノージャンルイベント)

このくらいまで頑張るのかとか。私自身は、たとえ同じ状況になっても、名前にそこまで打ち込まないと思う。でも、人はそれぞれだから。

他人を傷つけるわけでもない誰かの極端さは、どうしてこうも面白いのだろう。その人が、その人にとって大事なものを、周囲をはばかりず、針を振り切って遂行しているとき。それは、世界に一つの豊かさが増えるときだと思ふ。それぞれの人は、しばしば、それぞれの素敵な極端さをもっている。

そして、その極端さを見るまなざしの主それぞれもまた、異なる人生を生きている。それぞれの人は、ものすごく違う世界を見ていると思う。その中で、似ている度合いが高くて互いの性質を共感しやすい間柄もあるし、似ている人の多い人たちもいるわけだけれど、いずれにしても私たちは、よほどのことがないと、その視界を交換することができない。

物事の見られ方は、当たり前だけれど、他者のまなざしによって温度が決まる。大多数と同じか、違うか。違う場合、その違いはお金を生むか生まないか。何かの役に立つか、立たないか。弟さんの熱心も、人によつては、引く人もいるそう。それはまなざす側の視線の起点が、その人の位置から決して動かないからだと思う。

友人の家で、私も知っている友人の弟さんが、あるノートをめくっている動画を見せてもらった。それは弟さんが、お子さんが生まれるとわかったときから名付けに関する本を買い込み、専門家を複数訪れ、その集大成の候補で一冊をびっしり埋めた大学ノートであり、かつ、産まれても決めきれず悩みに悩んで、結局そのノートに書き連ねた中にはない名前に命名した、すったもんだの結晶のノートだった。

えんえんとめくられるページにえんえんと手書きされた名前……。面白すぎる。そして、嬉しくなった。こういう、この人の素敵さはこんなふうに表示するんだなあという事に触れるのが好きである。

この人には、これが大事なんだとか。こういう場面にこの人の優しさが表れるのかとか。ここを頑張るのかとか。

逆に、自分の目線が移動することで、まなざしが変わることもある。たとえば、脳梗塞で倒れ高次脳機能障害となり、リハビリを経てルポライターに復帰した鈴木大介さんの著書、『されど愛しきお妻様』。あれもこれも世の中についていけなくなった鈴木さんは発達障害の奥さんに、自分の今の状態は、これまで自分が取材してきた人たちの困り具合と同じでは、と言う。奥さんは、「ようやくあたしの気持ちが変わったか」と返す。

これほどの視点の移動は珍しいけれど、たとえば育児を本格的にやるようになってまなざしが変わった男性の発言はしばしば見られる。

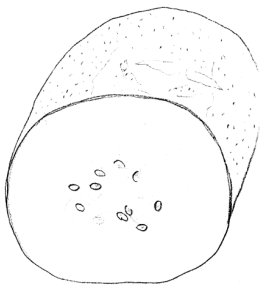
そして、同じ体験をすることだけが、他者の視線に触れる方法ではない。まなざしの起点を移動させることは、自分自身の言動を移動させることとイコールではない。弟さんの優しさの熱量に嬉しくなることと、私が彼と同じ言動をとることは違う。

同質性の高い社会では、まなざしの起点を移動させる必要性が認知されにくい。他人と違う性質の多い私に、面食らったり矯正を要求したりしてくる周囲をえんえんと見てきた。あるいは、そもそもそんな性質の人間がいることがまったく想定されずに話が進められる場合、その人の目の前に私はいらなければならないけれど、その人のまなざしの中に、私自身はいない。違う星から間違ってここに生まれ

てしまったような気持ちで、私はおろおろと、自分に無い文法を観察して考察して無様に擬態したり、疲れ果てて手放したりする。

願わくば、優しいまなざしをしてほしい。かなうなら、優しくまなざされていたい。

気づかずに誰かの庭を踏みに行かないでいられますように。地図の上から、消してしまいませんかのように。私の庭とあなたの庭は違うけれど、私が私にとつての美しい庭を作るように、あなたの庭もあなたにとつて美しいと嬉しい。そのとき、私はあなたの庭に遊びに行く。



Uり 絵画

## なんてったって春

スザワ マリコ

(考古系もの書き)

「なんで春なんでしょうね」と彼女は言った。

事務所が移転するため、思い切って引越すことに決めたのはいいが、春先の不動産屋は忙しくなかなか捕まらない。大学生の時に三月だけアルバイトをしたことがあるが、ひっきりなしにやって来る新入生に追われて食事もロクにできなかつたことを懐かしく思い出す。不動産屋の彼女曰く、社会人も学生も一気にやってくるので、とにかくこの時期はというか、この時期にだけ忙しさが集中するのだという。

そもそも春は目まぐるしい。

梅の花が散り、冷たい風が吹かなくなつたと思つたら、つくしが顔を出し菜の花の香りが漂い始め、枯れ木だった近所の庭木に大ぶりの木蓮が咲いたのを眺めている内に桜が花芽を出し始める。

職員が居なくなり、机やパソコンといった荷物が一切無くなりがらんどろになった事務所を眺めていたのが三月の終わり。五十人近い人が二階にまで居た記憶と、空になった部屋は同じなのに重ならないでいて、何となく立ち去り難かつた。大阪に帰る上司に最後に大きく手を振ってからもう一月になる。

咲く前の桜の木は仄かに桃色になり、独特の、春の臭いとしかいいようのない香りがする。何時咲くのだろう、とそわそわしていたらあつという間にソメイヨシノが枝が折れんばかりの花を咲かせ、桜を見かけては落ち着かない日々が続く。そうしている内に雨風で花が散り葉が満開となり、惜しむ間もなく今度は八重桜が咲き始める。新しい事務所の周囲は、ソメイヨシノではなく八重桜が並木をなしていたことによりやく気が付いた頃には、もう十分すぎるくらい春であつた。

引越しまでの間、鳥取から車で通っていた。湖山池の南側を抜け、鳥取西道路の高架と沿うように浜村まで走り、湯梨浜町に入ってから九号線を海沿いに走るルートだ。

春はとにかく心を乱す。

同じ道なのに毎日風景が変わっていく。満開のソメイヨシノを眺めながら総合運動公園を過ぎ、湖山池沿いの



名も知らない公園の桜の向こうに湖山池と青島が見えることに気が付いて心奪われ、立ち止まりたい気持ちを押さえアクセルを踏むと、今度は湖面に突き出だすような桜が目飛び込んでくる。

発掘現場でよく見たあの桜並木の間に高架が通り、かつて遺跡だった所がすっかり土とコンクリートで出来た構造物になっている様に心痛めたかと思えば、白と桃色と紅色の花をつける一本の木を見かけてその名前が気になって仕方なくなる。

この二年間ほとんど事務所に籠もっていたからだろうか、それとも大きく環境が変わったからだろうか。春が来て、何もかにもが珍しく、鮮やかに映る。

荒れた風の吹く日の海辺は白兔が跳ねるように絶えず波が押し寄せ、朝風の日には水平線が曖昧で海のようにも空のようにも見える。山並みすらも海と一続きに見える。だなんて、きっと春でなければ分からなかった。

新しい事務室からは、湖畔と大山が見える。朝早くにはしじみを取る船が朝靄の中間々と浮かび、背後の山並みは日に日に鮮やかな萌黄色の点が増え緑も深くなっていく。最も大山の方は、雪が残っていると思ったら何時の間にか並々と葉を広げたケヤキのせいで見えなくなってしまう。

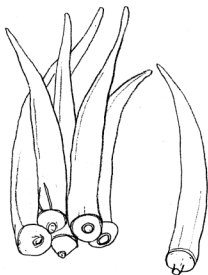
なぜ春なのだろう、と自分に問うてみる。

春は心身ともに体調を崩す人も多いと聞く。職場や学校などの環境が変わり、周囲を取り巻く季節さえも目まぐるしく変わったら、それは確かに疲れるだろう。引越し難民なんて言葉も聞いたくらい、春と同時に挙って変わろうとするのがこの島国の習慣だ。

けれど、春でなかったら、こんなにも心乱され、記憶に鮮明に残ることもなかっただろう、と思う私がいる。

事務所が片付いてきたと思ったら今度は新居、ときて、片付けやら手続きやら、目まぐるしさにたくたくに成りながらも、どこかワクワクもしてしまう。

仕方がないのだ。なんてったって春、なのだから。



0くいはみ  
たあいく

# カタストロフィックな予感

土賀 啓三

(米国シガン州 隠棲)

今月も超短編小説のようなものを掲載戴こうかと思つていたところ、書き始めて筆が滑り、気が付くと既に三千字を超えていて、奈良さんから今後制限字数千六百字を越えることは一切罷り成らぬ、と釘を刺されていたので、これはお蔵入り。

書こうとしていたのは、大体こんな内容であつた。

やや遅めのリタイアメントを予定していた六十五歳になつた途端、「私」は脳血栓で倒れ、車椅子生活を余儀無くされる。かといつて悲嘆にくれている訳でもなく、決めかねていた幾つかの引退後の選択肢が決定不要、もしくは狭化されただけで、ふたりの娘と、日々を(広義な意味に於いて)静謐に過ごしている。

一緒に住んでいるのは長女と三女で、というより、このふたりは一度も家を離れなかつた、というのが正確だ。

①長女には知能障害を伴わない、アスペルガー的自閉

症の兆候があり、苛めの対象となつて、自己の「弱さ」に対する自家中毒的嫌悪が、特に妻に対し、(内弁慶的に)家庭内暴力となつて表出する。

②一番なついでに社会性の欠損もなかつた次女は、先住民族(インディアン)擁護団体の弁護士となり、ニューメキシコ州のある部族の酋長(といつても東部名門大学出のエリート青年)と同棲中。この子に對しては将来、自立していけることに對する不安は全くなかつたが、逆に一旦家を出ると寄り付くこともない。最近ではインディアン絡みのスポーツチーム名やロゴの差別性に関する係争で、時折TVのニュースで見掛けるくらい。

③三女は、ミドルスクール(六年生)に上がると同時に登校拒否が始まり、セラピストとのカウンスリングは毎週受けていたものの、原因は同定できなかつた。長女の暴力に耐え兼ねた妻の出奔とほぼ機を同じくしているので無関係ではないのかもしれないが、幼児の頃から消えてなくなるような幽けさが漂い、事実朝陽の差し込む自室でピアノを弾いている様子を覗き見ると、輪郭がぼやけて半透明化するような錯覚さえ覚える。

④妻は一回り以上年下で、南カリフォルニア、アーヴァインの大学で教えている際の学生であつた。妻帯者の「私」は離婚して彼女と一緒にゐた。物静かで、心根の優しい女だが、アイリッシュ系の熾きのような情念が垣間見える瞬間がある。大学ではポートの

選手で、長女の暴力には耐えていたものの、反射的に手が出ることもあり、その気になれば華奢な娘を圧倒することは容易の筈で、家を出たのはいつかそれが起こることを怖れたからかもしれない。

⑤登校拒否に対するホームスクーリングという制度があることを知り、アサインされた派遣教師には結局三女が高校を了えるまで面倒を見てもらい、これほど有難いと感じたパブリックサービスは他になかった。また妻の出走と入れ替わりのような、週五日の彼女の家庭内に於ける存在は、無論意図された訳ではないが、妻の代替のような印象を醸し、三女も彼女なりの なつき方を示した。

⑥脳血栓で倒れた後、週に一回家の掃除や買い物等、身の周りの手伝いをしてくれる女性を雇った。妻と仲の良かった近所の主婦で、今でも連絡を取り合っている様子。妻とは「私」もメールで近況を報告しあったりしているが、病を得、ヘルパーを探している、と漏らしたところ、彼女が頼んでくれた。今では仕事を超えて、ふらっと寄ってコーヒーを淹れ、一緒に飲んでいたりしてくれる。

以上、六人の女達と「私」との間で生じる事象、というのが大まかな物語の枠組み。音信不通に掲載して戴いた数編の「超」短編ではなく、六、七十枚のいわゆるオーソドックスな短編になるのではないか、と思っている。これまでの体験から、登場人物は少なくとも一ダース以

上いないと、それ以上の長さにはならないような気がする。

さて、そろそろ千六百字だ。飽くまでも「枠組み」で、これも体験から、実際に書いてみないとどう展開するかはわからない。僕の書くものに出てくる男は皆女癖が悪いので、⑤と⑥には手を出すに違いない。長女と出走した妻との間にカタストロフィックなことが起こりそうな予感もする。

### いかのぼり

五百川 知子 アシル

水牛に揺られ日永の島唄よ

暮遅し代る代るにポール蹴る

花籠の小さき諍ひスイトピー

農知らぬ吾も誘はれて春祭

たかだかと砂丘の空に凧

# 迷子のはなし



ドラマメリア

(座敷わらし)

先日、大阪で迷子になった。

元々重度の方向音痴だ。京都に住んでいた頃も、地下鉄の駅から地上に上がるとどちらが目指す方向かまったくわからず、とりあえず歩いてみたのはいいけれど、途中で案内表示に行き当たってみたら反方向。というところがままたった。しかし最近、何度か東京・大阪に出張の機会があり、複雑な乗り換えも首尾よくこなせたのに、気をよくして、……まあ少し慢心していたのだ。

目指す施設のアクセスマップに、周辺の地図も印刷。

大阪駅の改札を出て、いざ出発……したのだが。二文目の「動く歩道を左に見ながら進みます」という説明で既に迷子。左目で見ただけで、そこからどうすれば。違和感を感じつつ構内を出てしばらく歩いたところで、行き過ぎたことに気づいて本来の道へ合流するであろう脇道に入る。

……これがまずかった。料理音痴が適当に味つけてはいけないうように、方向音痴は道順にない経路を選んで

はいけなかったのだ。それから小一時間ぐるぐるとさまよい続け、刻々と迫るイベントの開演時間。

進退窮まっつていに禁断のグーグル先生を起動、道案内を開始。これでもう安心だと思った……のに。道案内の指示どおり進んでいるはずなのに、ルートがどんどん変わっていく。そうか、わたしが間違っているのか。表示の残り距離がどうしても四五〇mから縮まらない。

どうにもならなくなつて最終的にタクシーに飛び乗り、開演時間にはなんとか間に合った。まあそうだよなあ、と今は思う。自室でこの原稿を書いている自分が、いまだどちらの方角を向いているかもわからないのに。目印もない知らない街で目的地にたどり着けるわけがないよなあ。

## ・編集後記：

人に勧められてネックピローを買いました。とても快適です。今後の出張や修行のおともに。      ドラメリア (編集長)

激しい環境だから生き残れたという逆説も大事ですね。『彼らがいなくなる前に』という少数民族の写真集に感動。ジミー・ネルソン写真。パイインターナショナル刊。本のビオトープ

の原点がここにあります

奈良敏行(発行人)